〈研究ノート〉

書師岡村元春と義山版

松永知海

一、はじめに

近世の出版文化を考える上で大蔵経の出版は多大な影響を与えた。慶長勅版は有名であるが、古活字出版の集大成は天海版といわれる大蔵経であり、整版出版を考える上では黄檗版を抜きにしては考えられない。出版文化を語る上で質的にも量的にもこれ程膨大な出版はないからである。天海版は一蔵を印刷するのに十二万枚以上の紙を必要とし、少なく見積もっても二十蔵は印刷され、計算すると紙だけでも二百四十万枚以上の均一の上質紙（A3版大）を漉く必要があったわけである。天海版に使用された活字は寛永寺に現存している物だけでも約二十六万個ある。[1] 一字一字を彫りだす職人にしても、組版をしていく職人にしてもこれほど組織的大規模な印刷物は他にない。黄檗版に至っては重要文化財に指定された版木だけでも四万八千二百七十五枚であり、実際にはそれ以上の整版が黄檗山宝蔵院版木庫に所蔵されているわけだからこれも当時の出版界の中では大きなプロジェクトといっても過言でない。それも鉄眼という一黄檗僧が、たとえ出身の熊本細川侯の援助があったにせよ、大事業を完成させたことは鉄眼の人間的魅力だけでは語り尽くせない社会的文化的さまざまな要素が成熟してはじめて成し遂げられたものといえる。版木一つをとっても、縦二二×横八〇cm、厚さ一・八～二cmの節のない一枚板を用意する必要がある。調査によればその桜材の版木は約六万枚[2]というから、一本の桜の木から何枚の版木が採れるのかわからないが、芯の所は使えないので、一本の桜の木から二十枚の版木ができたとしても三

千本の桜の木を切り倒したことになる。吉野の桜は上千本、中千本、下千本といわれ三千本の桜が有名だが、もしそれらを一度に切り倒したらそれこそ当時としても大変な環境破壊をしたことになろう。これらのことを考えると黄檗版という一つの出版だけでも国家的大事業であったと思われる。

さて、その大事業の成功にはさまざまな要因があるが、その中心というか、求心力の一つに「黄檗文化」といわれる中国からきた新しい刺激があったといえよう。日本の仏教界においては有りえない朝に坐禅、夕に念仏という勤行を黄檗ではつとめていたわけで、当時の既成の宗派概念では理解し難い宗派[3]に自由な発想で参禅し帰依した人々が黄檗隠元の名のもとに集っていたと思われる。そのような新鮮な空気のなかに一人の書師がいた。書師というあまり聞き馴れない言葉を使ったが、版下書家といってもよい。書家はたくさんいても、版下書家と認められ名を留めた書家はあまりいないと思う[4]。岡村あるいは岡元春は黄檗に引寄せられ見出された書家といってもよい。その彼が江戸期を代表する浄土宗の学僧の一人、義山が出版する校訂本にかかわっている。

元禄十年（一六九七）、浄土宗では円光大師という大師号を東山天皇から法然上人にはじめて賜わった。法然上人が師と仰ぐ善導大師の主著である四帖書も義山・忍澂・良仰といった浄土宗を代表する学僧がそれぞれの特徴をだして出版している。

忍澂は元禄四年（一六九一）「会本」という形式で『観無量寿経』とその注釈書である『観経疏』とを段落で分けながら、読む者が経典とその注釈書とをいちいち手に取ることなく一冊で対照させて理解を深めさせようとする大変便利な本である。

良仰は元禄六年（一六九三）「科文」という段落とその段落の内容を明示する名称とを『観経疏』の上につけ、理解を一層深めさせようとしている。

義山は元禄七年（一六九四）四声点と清濁点、送仮名と返り点とをつけて、音訓両用に正しく『観経疏』を読めるように出版している。

これらの出版はほとんど同時に行われ、その『観経疏』の読み方についても三者三様である。浄土宗で定められたという性格ではなく個々の学僧がそれぞれの立場から出版したものと理解できる。

義山が校訂した浄土宗典籍は彼の伝記『洛東華頂義山和尚行業記并要解』によればつぎの一三部である[5]。『三経一論』『論註』『安楽集』『五部九巻』『群疑論』『選択集』などがあり、そのほかに了慧集録の『漢語灯録』『和語灯録』出版や『當麻曼陀羅述奨記』などの著作もある。また義山の校訂本は音訓両読の便がはかられ、その読み方も統一されて、会通できるように

意識して出版されている。それらの端正な書体は書師元春の仕事のようである。

元春は黄檗宗で書家として高く評価され、隠元禅師とともに日本にやってきた中国人の高僧たちからも賛辞が寄せられている人である。本稿では版下書家として寛文から元禄期に活躍した元春（岡村元春）の業績をたどり、義山の浄土宗典籍校訂出版を含め音訓両読用の典籍出版に書家としてささえた一面を明らかにしたい。

二、元春と黄檗の明朝体

元春を版下書家としてひろく紹介したのは竹村真一氏である。その著、『明朝体の歴史』で、つぎのように紹介している。

岡元春は寂棲と号し、京都洛北に住み延宝年間の初めから約三〇年間にわたって、主として黄檗関係の版本における、版下用としての明朝体の書を書き続けた人である。当時の開版における陰の力として銘記すべき人であろう。その代表的な作品ともいい得るものを年代順に挙げると、第6表のようになる。

下の表に見られるように、寛文・延宝・天和・貞享から元禄初期にかけて活躍し、よく揃ったやや長体がかった横画が右あがりの文字である。（以下略）[6]

といい、表に一七点の元春書の刻本を載せている。

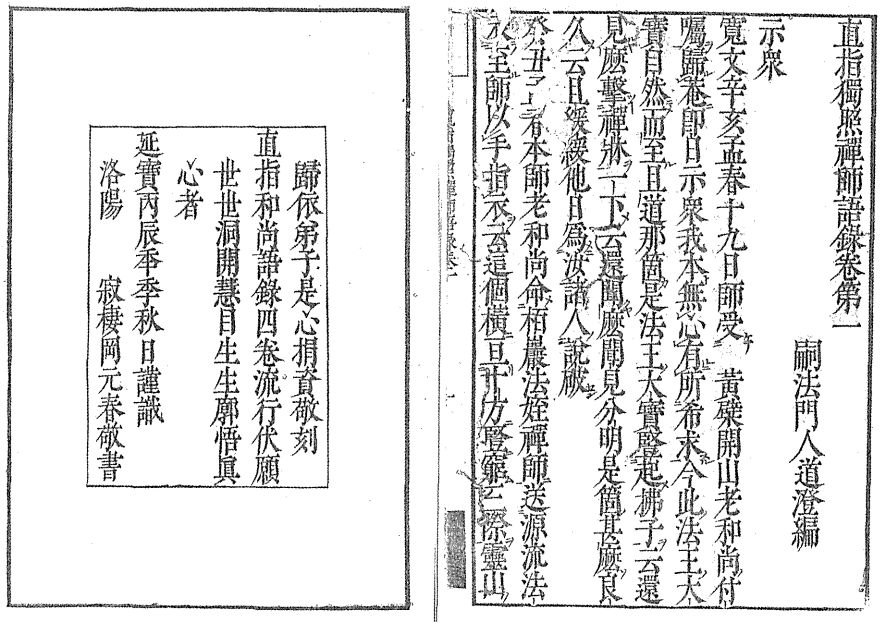
そのはじめは、延宝四年（一六七六）に刊行の『直指獨照禅師語録』四巻で嗣法門人道澄の編集になるものである。その書体は〈図版1〉であり、奥付に次のようにある。

歸依弟子是心損資敬刻
直指和尚語録四巻流行伏願
世世洞開慧目生生廓悟眞
心者
延寶丙辰季秋日謹識
洛陽　寂棲岡元春敬書　（黄檗文華殿蔵）

その最後は元禄八年（一六九五）の『黄檗二代　賜紫木庵和尚年譜』二巻で、嗣法門人南岳道宗が編集した。その書体は〈図版2〉のようである。その奥付には、

福濟寺嗣法孫宗澤東瀾奉貲敬刻
黄檗二代木老和尚年譜壹冊伏願
祖燈續燄令萬古以輝煌法脈長流
使三根而普潤者耆
元禄八季歳在乙亥南呂月吉旦謹識
洛陽　寂棲岡元春敬書　（黄檗文華殿蔵）

とある。



直指獨照禪師語錄卷第一

嗣法門人道澄編

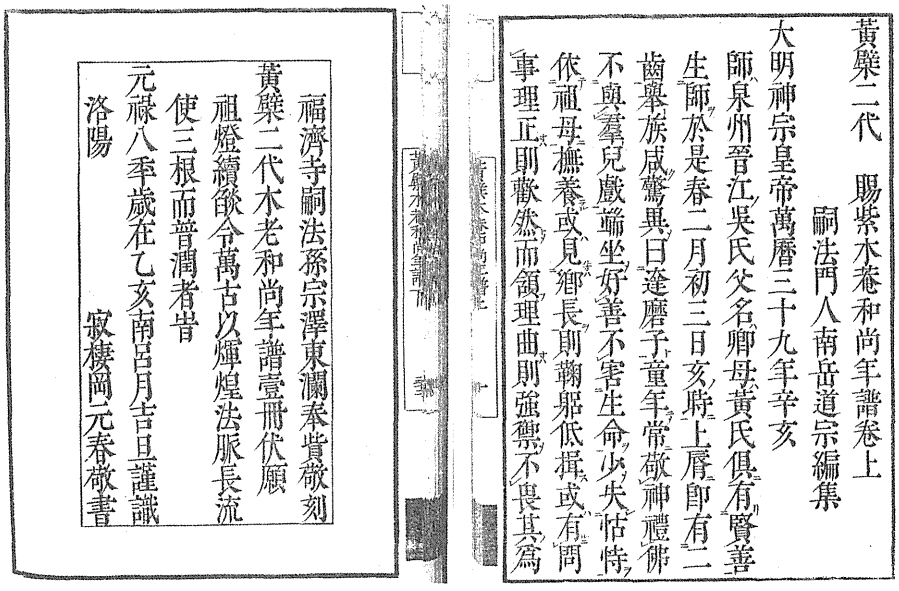
示衆

寛文辛亥孟春十九日師受黄檗開山老和尚付囑歸卷即日示衆我本無心有所希求今此法王大寶自然而至且道那箇是法王大寶聲色拂子云還見麼擊禪牀一下云還聞麼聞見分明是箇甚麼良久云且喫緩他日爲汝諸人說破

癸丑二月本師老和尚命相農法姪禪師送源流法至師以手指衣云這個横豆千仞豎窮三際靈山

歸依弟子是心捐資敬刻
直指和尚語錄四卷流行伏願
世世洞開慧目生生廓悟眞
心者
延寶丙辰季秋日謹識
洛陽　寂樓岡元春敬書

〈図版1〉



黄檗二代　賜紫本卷和尚年譜卷上

嗣法門人南岳道宗編集

大明神宗皇帝萬曆三十九年辛亥

師泉州晉江吳氏父名卿母黄氏俱有賢善生師於是春二月初三日亥時上唇即有二齒舉族咸驚異曰逢磨子童年常敬神禮佛不與羣兒戲端坐好善不害生命少失怙恃依祖母撫養或見鄉長則鞠躬低揖或有問事理正則歡然而領理曲則强禦不畏其爲

福濟寺嗣法孫宗澤東瀾奉貲敬刻
黄檗二代本老和尚年譜壹冊伏願
祖燈續燄令萬古以輝煌法脈長流
使三根而普潤者皆
元禄八季歲在乙亥南呂月吉旦謹識
洛陽　寂樓岡元春敬書

〈図版2〉

また竹村氏は彼の代表的書体例として、『宗統録序』を写真で紹介している。いまその『宗統録序』と黄檗版大蔵経の目録として用いられた鉄眼の序文の字と比較してみよう。〈図版3〉（昭和四五年三月、其中堂）〈図版4〉

いずれも明朝体の字である。鉄眼の序文は『大明三藏聖教目録』のはじめにのせるもので、後水尾法皇に献上した時のものである。岡元春の書とは書いていないが、比較してみると元春の書といっても不思議ではない。

このようにみてくると岡元春の書体は黄檗典籍のなか明朝体の模範的書体として評価されていることがわかる。

彼の版下書家としての仕事を隠元禅師をはじめとする黄檗の高僧たちが讃えていたことを明らかにしたのが、大槻幹郎他編著の『黄檗文化人名辞典』であり、それには次のようにある。

岡元春（おかげんしゅん？―一六六三～一六九五―？）書家。姓は岡、名を元春。元は玄にも作る。号を寂棲。京都の人。寛文三年刊記の『隠元和尚雲涛三集』巻五に「示元春信士」五言八句があり、「三載學成書　書成樂有餘」とある。（中略）

高泉性激の『洗雲集』巻九に「岡元春善作蘇體、獨歩一時。日來為予寫語録稿二十餘巻。戯贈」と題する七言絶句に「合眉山蘇」とあり、月潭道澄の『禅悦集』巻三の「贈元春字師」の七言律中には「学成蘇体、最精美」とある。この「蘇体」は、明の万暦の書家蘇眉山の書体のことと思われ、いわゆる明朝体を指しているようである。初期の黄檗語録の版本中、一見してそれとわかる精美な明朝体がみられ、奥付に、元春の書になることを明記している。元春は黄檗草創記に明朝体を学び、黄檗語録を中心に、当代著作物の明朝体による上版に当って、版下原稿の書家として自他共に許す存在であったのであろう。[7]

と記している。

そこで語録類から元春と黄檗僧との交流の一端をみてみよう。日本初代の黄檗山万福寺の住持、隠元の語録『隠元和尚雲涛三集』巻五[8]並びに『隠元和尚雲涛続集』には、

示元春信士

三載學成書　書成樂有餘　縱横皆中節　點畫契眞如
海國誰為侶　文房獨善居　心花開夢筆　一氣貫雲衢[9]

とある。当代の書家は多くとも、賛辞を戴いたのは元春だけであって、彼の書く字の一点一画が眞如に契うといって隠元は称賛している。

隠元とならび黄檗の三筆の一人として名高い第二代住持木庵も彼に五言絶句をよんでいる。

示元春善士

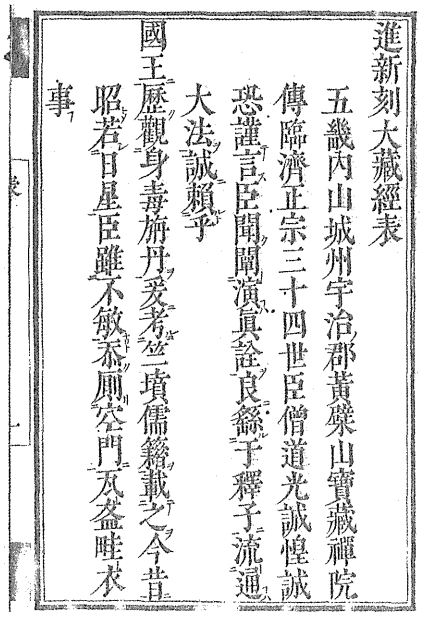
太上法皇御製

朕召龍谿禪師提唱瀧輪
請益錄發揮至賾張皇幽
微杲日麗天清風帀地令
人成不見之見得未聞之
聞且上座堅請師不獲已云廓然眞際業風
生桦雨喝雷天地驚無限煙雲收海外珊
瑚枝上月圓明

特賜大宗正統禪師宗統錄　終

天和癸亥三季春王正月穀旦版藏祥雲
山慶瑞禪寺　京上元春岡寂樓敬書

〈図版3〉



進新刻大藏經表
五畿內山城州宇治郡黃蘗山寶藏禪院
傳臨濟正宗三十四世臣僧道光誠惶誠
恐謹言臣聞闡演眞詮良繇于釋子流通
大法誠賴乎
國王歷觀身毒旃丹爰考竺墳儒籍載之今昔
昭若日星臣雖不敏忝厠空門瓦盎畦衣
事

〈図版4〉

心精藝亦精　點畫自分明　活脱龍鱗勢　風雲筆下騰[10]

「点画、自ら分明なり、活脱龍鱗の勢い」とは、明朝体のなかでもはっきりとその特徴をいい表している。元春の書体を表現しているといってよいであろう。

隠元より遅れること七年後に来朝した、第五代の黄檗山住持高泉は元春をつぎのように語っている。

戲贈春逸士

洛陽有酒仙　爲性甚超逸　字體法蘇家　海上稱第一[11]

岡元春善作蘇體、獨步一世。日來為予寫語録稿二十餘卷。

戲贈

洛陽有客隱蓬廬　聲名無翼飛江湖　為予幾月録間語

筆札妙合眉山蘇[12]

渡来僧高泉の目にうつった彼のひととなりの超逸ぶりとはどんな様子であったのであろうか。又高泉のために語録を清書していたという。「字体法は蘇家なり」とは、蘇眉山の書体とよく符合するという。その書体について『黄檗文化人名辞典』にいうように、日本黄檗僧月潭道澄もつぎのように言及しているところである。

贈元春字師

喜子書工巧入神、學成蘇體最精眞、初疑棗木災來久、

漸見霜毫染尚新、

夢裏江淹何足羨、林中智永且為鄰、毛端傾出言辭海、

永使流通萬劫春[13]。

蘇眉山について、その書体がどのようなものかわからないが、『中国書法大辞典[14]』によれば、明万暦の頃の福建の人で、字は志乾という。黄檗宗はもともと福建にあったから、眉山の書体はよく知られていたのであろう。

以上、隠元をはじめとして木庵、高泉といった万福寺住持の語録から、元春に贈った詩をみてきた。酒仙であり超逸したひととなり、さらには明の書家蘇眉山の流れをくむ書体として元春は高い評価を得ていたことが伺える。

三、浄土宗学僧義山の出版と元春の書体

義山（一六四七―一七一七）、字は良照、蓮社号は禅蓮社信阿円観であり、伝記は珂然が寛保元年（一七四一）に書いた『洛東華頂義山和尚行業記并要解』に詳しい。彼は正しい宗典の流布を目指し善本を諸方に求め校訂出版した。珂然の伝記によれば、つぎのようにいう。

又師恒歎恨宗籍之多魚魯古書之從陰晦。遂自三經一論以至論註安樂五部九帖群疑選擇等諸部求得善本皆悉校正、且改句讀訓點加四聲清濁、重壽之梓以便初學[15]。

いま出版年代順にそれらの本の奥付の概要をみてみよう。

（1）元禄四年（一六九一）『浄土三部経』四巻〈図版5〉

『佛説無量壽經』二巻『佛説觀無量壽經』一巻『阿彌陀經』一巻

四声清濁点、句読点、送り仮名、返り点。

元禄四年歳次辛未孟夏佛誕生日

釋良照義山敬校合／借月堂元㫖棲拝書／貝葉軍

成經謹刊

（2）元禄七年（一六九四）善導撰『觀經疏』四巻（四帖疏）

〈図版6〉

四声清濁点、句読点、送り仮名、返り点。

元禄甲戌臘月如來成道日　沙門義山募刻

（字体は同じ、書師名は記していない。）

（3）元禄七年（一六九四）善導撰四部五巻〈『轉經行道願往生淨土法事讃』二巻『觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門』一巻『往生礼讃偈』一巻『依觀經等明般舟三昧行道往生讃』一巻〉元禄七年刊本は未見。

四声清濁点、句読点、送り仮名、返り点。

（般舟讃巻末）〈図版7〉

元禄甲戌臘月如來成道日　沙門義山募刻

岡　元㫖棲敬書

書林　采賢堂謹刊

享保廿乙卯（一七三五）中春求版

今井七郎兵衛　井上忠兵衛　合刻

（4）元禄九年（一六九六）『選択本願念佛集』二巻（選択集）

〈図版8〉

四声清濁点、句読点、送り仮名、返り点。

元禄九年丙子正月二十五日　沙門義山募刻

借月棲　岡　元春謹書

采賢堂　古藤春正監刻

（5）元禄九年（一六九六）『選択本願念佛集』二巻（選択集）

〈図版9〉

四声清濁点、句読点、送り仮名、返り点

元禄九年丙子正月二十五日　沙門義山募刻

享保廿乙卯中春求版　今井七郎兵衛　井上忠兵衛　合刻

（6）元禄十年（一六九七）『無量壽經優婆提舍願生偈并註』

（往生論）二巻

右三部妙典梓版置于知恩教院者也

○西磬上人春秋四十又九三經一部訂正四聲及清淨以與隅田性阿弥陀佛鐘刻藏于總州下河邊庄大野鄉談場一本體上人春秋十三有七歲

○明應二年春二月當麻行磬上人新熙四聲輕重一本

○伊勢上野入道一寶照珠居士嘉吉元年冬十二月懇求台嶺遠者點洪四磬勵志新刻一本

今以右三本校合成一重正文字真俗四磬句逗鎔梓以備無窮者也

元祿四年歲次辛未孟夏佛誕生日　釋良照義山敬按合　借月堂元春樓拜書　貞徹筆　成經謹刊

〈図版5〉

僧淑誉捐銀十五錢　尼妙意　僧瞬雲各捐銀一錢半　僧梅笛捐金一兩鷹　道春　周栄菩提　松月　捐銀五錢鷹　露幻寞福　慶泉捐銀四錢三分鷹　妙專　善入　卯幻　栄億　栄法　可頓　寞福　休味　捐金一兩鷹　專入　西緣　白金　妙專　專可　淨入　妙祐　妙運　妙敎　清圓　妙頓　久圓　道圓　妙圓　相春　妙專　寞福　共助刻斯

觀經證誠疏四卷　伏願

回此功德普施法界共生安養齊悟法忍

元祿甲戌臘月如來成道日　沙門義山募刻

〈図版6〉

依觀經等明般舟三昧行道往生讚一卷

比丘僧善導撰

敬白一切往生知識等大須慚愧釋迦如來實是慈悲父母種種方便發起我等無上信心又說種種方便教門非一但爲我等倒見凡夫若能依教修行者則門門見佛得生淨土若見聞有人行善者卽以善助之若見聞有人行教讚之若聞人說行卽依行順之若聞人有悟卽依悟喜之何意然者同以諸佛

覺壽捐銀十五錢鷹　宗源　壽清寞福　宗務　壽林共捐銀十五錢　貞俊　清壽　素仙各捐銀十五錢　祐玄　貞壽共捐銀四十五錢鷹　栄休　祐桂　妙應　利貞　宗貞寞福　德甫　貞三共捐銀三錢　彥一捐銀一錢　宝介　貞玉各捐銀十五錢

敬助刻斯

法事讚二卷　觀念法門一卷　往生禮讚一卷　般舟讚一卷　伏願

回此功德普施法界共生安養齊證無生

元祿甲戌臘月如來成道日　沙門義山募刻

岡　元春樓敬書

書林　采賢堂謹刊

〈図版7〉

婆藪　般頭菩薩造　後魏菩提流支譯
四声清濁点、句読点、送り仮名、返り点。
元禄十年　丙子正月二十五日　沙門義山募刻
享保廿乙卯中春求版　今井七郎兵衛　井上忠兵衛　合刻

（7）元禄十一年（一六九八）『安楽集』二巻　釋道綽撰
四声清濁点、句読点、送り仮名、返り点
元禄十一年戊寅年正月二十五日禪蓮社釋義山募刻
享保廿乙卯中春求版　今井七郎兵衛　井上忠兵衛　合刻

（8）元禄十六年（一七〇三）『當麻曼陀羅述奨記』四巻
義山著書。
送り仮名、返り点
元禄十六癸未歳三月穀旦　京四條通堀川角松葉軒
書林　今井重左衛門　羽倉大介勝正梓行
（ここには元春の名前はない。）

（9）寶永二年（一七〇五義山跋）『釋淨土群疑論』七巻
句読点、送り仮名、返り点
（ここには元春の名前はない。）

（10）正徳五年（一七一五）『黒谷上人語燈録』十八巻
（『漢語燈録』十巻『和語燈録』五巻『拾遺黒谷上人語燈録』三巻）
了慧集録正徳五年（一七一五）乙未稔正月吉日書林
芳野屋権兵衛　澤田吉左衛門
（ここには元春の名前はない。）

以上、義山の出版にかかる典籍を紹介した。（1）（3）（4）の三点には書師元春の名前がある。また（2）は元春の名前はないものの五部九巻として一具の出版であること明らかで書体も同一であり、これも元春の仕事である。（5）（6）（7）はこれらは（3）と同じ、みな「享保廿乙卯中春求版」で今井七郎兵衛と井上忠兵衛とが合刻したものである。書体も同一で初版の奥付には「岡　元胄棲敬書　書林　采賢堂謹刊」とあったと考えられる。（8）（9）（10）ともに（7）までの書体と同一ではないが、次に検討する。寂棲のほかに借月という号のあったことがわかった。

遺憾前恐令破法之人墮於惡道也

選擇本願念佛集

選擇本願念佛集者吾祖空和尚因月輪殿下請述也有四本高第一稿本始草論三經說點者是也第二刪本初呈殿下及授光師者是也第三正本末後脩飾刊行平氏作序者是也第四廣本門人增證其文者是也初後二本不行于世所傳刻者第二第三耳按吾祖以建暦辛未十一月自撰回洛而平氏序乃是月下旬作也誠知第三本者脩飾刊行皆出於祖意是爲正本矣延應元年有重刻第二本者數輒據元本以正錯謬其意豈非建暦本疑出於門人手而悉歟祖當誠寫行此書爲有當祖在日而門人妄改而恐刻之理耶且記主撰書稟承禪第二本而論字句可否則皆以建暦爲證豈非重脩飾耶然建長以降刊者悉從延應何哉今欲以建暦本鋟梓行世　本山知恩白譽大和尚偶聞此事歎感指背助刻刻成藏于本山又慎重之也姑識來由於後云

隨喜捐背助刻名件

洛陽清淨華院超譽和尚　長德山知恩寺玄譽和尚　紫雲山光明寺惠譽和尚

雒陽普願寺紀格和尚

元禄九年丙子正月二十五日

沙門義山摹刻

借月樓　岡　元春謹書

采實堂　古藤春正監刻

選擇本願念佛集者吾祖空和尚因月輪殿下請述也有四本高第一稿本始草論三經說點者是也第二刪本初呈殿下及授光師者是也第三正本末後脩飾刊行平氏作序者是也第四廣本門人增證其文者是也初後二本不行于世所傳刻者第二第三耳按吾祖以建暦辛未十一月自撰回洛而平氏序乃是月下旬作也誠知第三本者脩飾刊行皆出於祖意是爲正本矣延應元年有重刻第二本者數輒據元本以正錯謬其意豈非建暦本疑出於門人手而悉歟祖當誠寫行此書爲有當祖在日而門人妄改而恐刻之理耶且記主撰書稟承禪第二本而論字句可否則皆以建暦爲證豈非重脩飾耶然建長以降刊者悉從延應何哉今欲以建暦本鋟梓行世　本山知恩白譽大和尚偶聞此事歎感指背助刻刻成藏于本山又慎重之也姑識來由於後云

隨喜捐背助刻名件

洛陽清淨華院超譽和尚　長德山知恩寺玄譽和尚　紫雲山光明寺惠譽和尚

雒陽普願寺紀格和尚

元禄九年丙子正月二十五日

沙門義山摹刻

享保九年甲辰春求版

今井七郎兵衛合

井上忠兵衛刻

觀心觀即一心一心即止觀天台妙行亦不出此止觀雙運實爲妙行妙行者其惟止觀乎

起信義畢

延享六年龍集戊午仲春穀旦開版

雒城　寂樓　岡　元春敬書

銅駝坊書肆　鈴木太兵衛昌梓

＜図版8＞

＜図版9＞

＜図版10＞

四、元春の書体の出版

近世の刊本をみていると、明朝体以外にも彼の仕事をみることができる。それは明朝体を基本にしながらも楷書体に新しい書体を拓いたことである。

それらを刊行年代順にみていこう。

（1）『大乘起信論義』一巻　半紙七行

一行一八字返り点送仮名。

延寧六年（一六八九）〈図版10〉

雒城　寂棲　岡　元昔敬書

銅駝坊書肆　鈴木太兵衛冨（壽）梓

（2）『浄土十疑論翼註』二巻　不必著〈図版11〉

岡元春が浄土宗典籍の中、最初の仕事。題簽には「天台大師　浄土十疑論翼註　巻上（下）」とあり、延宝七年の自序がある。首題は題簽と同名で「泉濱沙門不必　述」とある。題簽と本文とは楷書体で、自序は明朝体で書かれている。（続浄七所収）

浄土十疑論翼註二巻　不必述

延宝七年（一六九〇）自序

洛東　元昔岡寂棲敬書

銅駝坊書肆村上勘兵衛壽梓

（3）『薬師如来本願功徳経』一巻　大唐三藏法師玄奘奉詔譯〈図版12〉

折本　返点送仮名付音読訓読両用。一行一七字四行一折。

元禄四年歳次辛未五月吉旦慈海宋順校合

元禄九年（一六九六）歳在丙子臘月初八日

雒東書師岡村元春棲敬書写

洛陽書林伊藤次郎兵衛刊行

（4）『薬師如来本願功徳経』一巻　大唐三藏法師玄奘奉詔譯

折本　返点送仮名付音読訓読両用。訳注頭書　一行一七字四行一折。前の本と本分同じ。

元禄四年歳次辛未五月吉旦慈海宋順校合

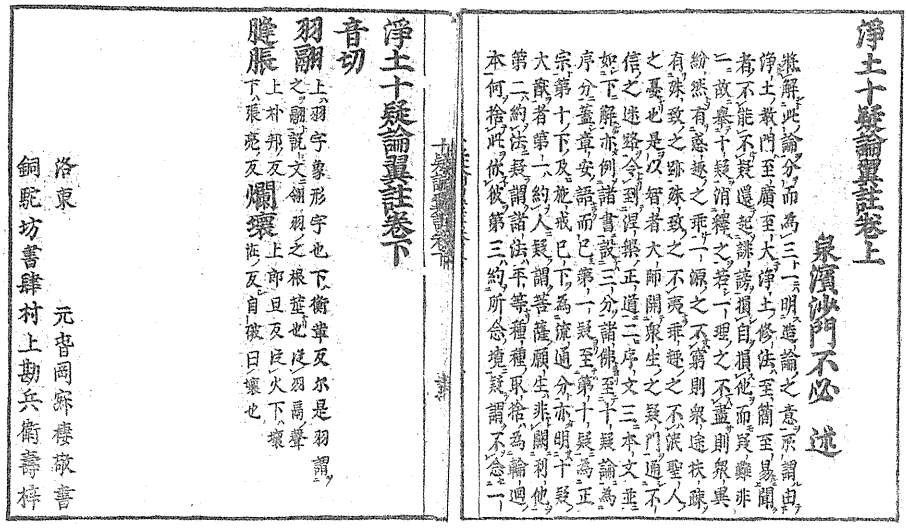
元禄九年歳在丙子臘月初八日

雒東書師岡村元春棲敬書写

洛陽書林伊藤次郎兵衛刊行　（矢野俊行氏蔵）

（5）『妙法蓮華經』八巻　姚秦三藏法師鳩摩羅什奉　詔譯

折本　一折四行　一行十七字　清濁句読点音読訓読



淨土十疑論翼註卷上

泉濱沙門不必　述

淨土十疑論翼註卷下

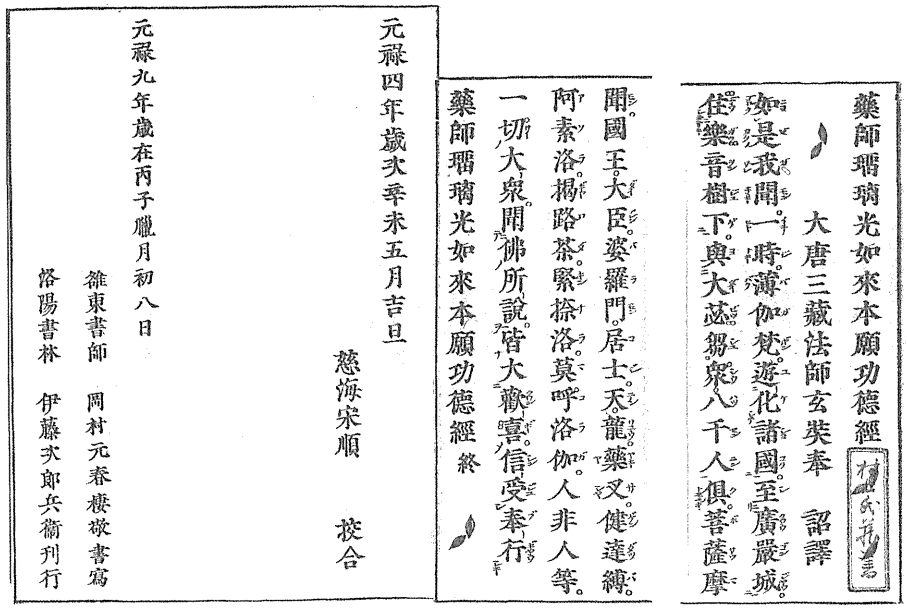
音切

羽翩　上羽守象形字也下衛韋反尒是羽翼之翼說文翩羽之根莖也從羽扁聲

膧脹　上朴邦反下陟亮反爛瀼　上郎旦反下如羊反自彼曰壤也

洛東　元春岡窪樓敬書

銅駝坊書肆村上勘兵衛壽梓



藥師瑠璃光如來本願功德經

大唐三藏法師玄奘奉　詔譯

如是我聞。一時。薄伽梵。遊化諸國。至廣嚴城。住樂音樹下。與大苾芻衆八千人。俱。菩薩摩訶薩。國王。大臣。婆羅門。居士。天。龍。藥叉。健達縛。阿素洛。揭路荼。緊捺洛。莫呼洛伽。人非人等。一切大衆。聞佛所說。皆大歡喜。信受奉行。

藥師瑠璃光如來本願功德經終

元祿四年歲次辛未五月吉旦

慈海宋順　校合

元祿九年歲在丙子臘月初八日

雒東書師　岡村元春樓敬書寫

洛陽書林　伊藤次郎兵衛刊行

（返点送仮名なし）。
元禄五年（一六九七）歳在壬申二月吉旦　慈海宋順校正
雒東書師　岡村元春棲敬書寫
洛陽書林　伊藤次郎兵衛刊行　（龍谷大学図書館蔵）

（6）『妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五』一巻
折本　一折四行　一行十七字。
一部清濁句読点音読訓読返点送仮名。
元禄五年（一六九七）歳在壬申二月吉旦　慈海宋順正
雒東書師　岡村元春棲敬書寫
洛陽書林　伊藤次郎兵衛刊行　（矢野俊行氏蔵）

（7）『首楞嚴神呪』一巻
折本　一折三行　一行十七字音読ルビ。巻末に「普回向」、「大悲圓滿無礙神呪」、「消災陀羅尼」あり。
借月棲　岡　元春謹書　（矢野俊行氏蔵）

以上、元春の楷書体の版下事例を七点みてきた。楷書体では岡よりも岡村姓を名乗っている場合が多い。また洛東に住いがあったことがわかった。さらに、参考として元春の名はないが書体により元春の手になると推定される出版として次のものがある。

（1）『佛説仁王護國般若波羅蜜經』二巻　折本　一折四行
一行十七字一部清濁点句読点、頭註
天和三年歳在癸亥臘月穀旦／慈海宋順校合。

（2）『大般若波羅蜜多經』巻第五百七十八
扉絵釈迦神王像、十六神王名、十六神王呪が経前にあり。
折本　一折四行　一行十七字返り点送仮名頭註
一部清濁点句読点
貞享二年歳在乙丑正月穀旦／慈海宋順校合／
洛陽書林伊藤次郎兵衛刊行

（3）『聖無動尊大威怒王秘密陀羅尼經』折本
一折四行一行十七字
巻末「三十六童子」「八童子」の名及び偈あり。
（矢野俊行氏蔵）
貞享二年乙丑九月穀旦
慈海宋順／書林伊藤次郎兵衛刊行

いずれも伊藤次郎兵衛の刊行で、慈海宋順校合の本である。このほかにも元春のものとおもわれる書体があるが、今後の課

題としたい。

五、おわりに

元春の書師としての仕事を中心にみてきた。黄檗宗関係では明朝体を中心とした仕事、浄土宗や天台宗では明朝体から離れ楷書体に新たな境地を拓いた。その特徴は、音訓読両用に使用された出版例が少なくない。この仕事は元春の独壇場といってもよい。浄土宗では名越派学僧義山が浄土宗の基本典籍を校訂出版しているが、先に述べたように、彼は音訓読両用にできるように出版している。そのような四声清濁点を付し、かつ返り点送仮名もつけ、さらに宗典としての格調を保ちうるような書体を拓いた、これこそが元春の仕事といってよいであろう。天台宗では慈海宋順の出版によく現われている。元春の書体の源泉は黄檗で培った明朝体にあり、発展して浄土宗をはじめとする岡村元春の楷書体としての版下書家の仕事があったといえよう。

〔註〕

(1) 水上文義「天海版一切経」(『寛永寺及び子院所蔵文化財総合調査報告上石造遺物・聖教典籍編』九九頁。東京都教育委員会、一九九九年三月)

(2) 熊本県教育会編『国定教科書に現はれたる名僧鉄眼』八九～九〇頁(六万枚と仮に称しているが、明治五年の調査では四五二八三枚、大正九年の調査では五六二二九枚とする。)一九二八年七月。

(3) 辻善之助『日本仏教史』第九巻　近世編之三、三二五頁、一九七〇年七月。

(4) 『日本書誌学大辞典』四八〇頁中(岩波書店、二〇〇〇年三月)「筆工」の項には「版下の筆者(筆工)の名を明らかにしている版本も少なくない」という。同辞典には「版下書きの名手としては丹波屋理兵衛」の名を挙げているのみである。三八四頁上。

(5) 『浄土宗全書』第一八巻、九〇頁下。

(6) 一一三頁、思文閣出版、一九八六年

(7) 四九頁、思文閣出版、一九八八年。

(8) 五丁ウ。

(9) 一丁ウ。

(10) 『木庵東来語録』巻第四、十七丁ウ～十八丁オ。

(11) 『高泉洗雲集』四巻八丁オ。

(12) 『高泉洗雲集』九巻九丁ウ。

(13) 『禅悦集』三巻二十四丁オ～ウ。

(14) 上巻七九四頁上。

(15) 註(5)に同じ。

追記

脱稿後、元禄三年刊『浄土三蔵二教略頌』佛教大学図書館蔵(宗書一九四)も岡村元春が版下を書いていることがわかった。

この論文をまとめるにあたり、黄檗文化研究所研究員大槻幹郎先生には黄檗語録についての御教示を得ました。また黄檗文華殿主幹田中智誠師には資料閲覧の便を計って戴きました。さらに貝葉堂矢野俊行氏には蔵書経典を呈示して戴きました。諸氏に甚深の謝意を表します。